

しろやま こしろう

## 城山の小四郎たぬき

いま ひやくねん まえ だいやま いただき ほくとう の おね せんたん おおひらい がのみくにすけ きす ししがはなじよう  
今から四百年ほど前、台山の頂から北東に延びた尾根の先端に、大平伊賀守国祐が築いた「獅子ヶ鼻城」があつたといわ  
れていきます。『日本城郭体系』によると、獅子ヶ鼻城は、地形的にみて東の獅子ヶ鼻と五十鈴神社のある北西部の尾根、および  
両方の要の位置にあたる竜王宮の祠のある頂の部分の三か所を含めた城構えでなからうかと書かれています。

ししがはな からほり どのい くるわ あき しろあと じもと むかし しろ はな しろやま よ  
獅子ヶ鼻には、空堀、土塁、廓があり、明らかに城跡であり、地元では昔から「城の端」また「城山」とも呼んでいます。

ほくせいぶ おね ぶぶん だいやまこふん しくつちようさ ちけい しゆつどいぶつ ほうふん せいきしよとう うえ ちゆうせいまつき  
北西部の尾根の部分については、台上古墳の試掘調査によって、地形や出土遺物から、方墳（五世紀初頭）の上に中世末期の  
山城があつた可能性があると報告されています。

むかし、この城山に小四郎というたぬきが住んでいました。ひとびと のらしこと お いえじ ちゆう く こしろう  
たぬきが動き出します。夜霧に包まれた城山に灯が一つ見えたかと思うと、それが二つになり、三つに分かれ、横に流れたかと思  
うと下の方に走ったりします。怖いもの見たさに元気な若者が山へ出かけてみると、何も変わったことはありません。ところが、

山へ行った者は、必ず顔に油墨を塗られて帰って来ました。人々は小四郎のいたずらだと笑い合ったそうです。

その小四郎たぬきは、「城山の小四郎と萩原の岡の山の杵造、常願寺のはげだぬきの三匹が集まると、屋島の源平合戦ができる。」と言われるほどの古だぬきだったそうです。

ところで、院内の里に力持ちで働き者の男がいました。城山のまわりは、急な崖や坂に包まれているので、お寺が立木の伐採をしようとしても、人々は怖がって、切ろうという人がいませんでした。すると、

「それではわしがやりましょう。」

と、その男が木の切り出しを請け負いました。そして、十日ほどかかって切り出しも終わった日の晩のことです。

家の者が、めいめいの箱膳の前に座って夕飯にかかると、男は御飯を盛った茶碗を両手に持って食べはじめました。家の者はみな驚きましたが、その様子を見ていたおじいさんが、

「これは城山の小四郎がとりついたのにちがいない。おはらいをしてもらわないかん。」



と言いだしました。

そこで、村人たちは手分けをして祈とう師を呼んで押んでももらいましたが、誰に押んでももらっても、小四郎が強くてのいてくれません。最後に、出雲さんと呼んでおはらいをしましたでしたがやはりききません。すると、神主は、

「これはなかなかのこわものじゃな。よしそれでは。」

と言い、三本の矢を神前に供えて、一心にお祈りをこめました。そして、畳の表にたぬきの絵をかい立て掛け、弓に矢をつがえて身構えました。

キリリと引きしぼってのたぬきをねらって矢を放つと、「パシッ!」。通ったはずの矢は、畳に通らずはね返りました。二本目も同じでした。最後の三本目の矢をつがえると、

「ちよっと待ってくれ。わしは山へ帰るから打たないでくれ。」

と小四郎が叫びました。

「どうしてこの男にとりついたので?」

とたずねると、

「城山の木をこれ以上切られると、わしが住みにくくなるのでこらしめたのだ。」

と言いました。

「それは悪かった。しかし木を切るのは今日で終わった。明日からは切らないので安心して山へ帰ってくれ。」

と言いますと、小四郎は離れたらしく、男は正気に返ったそうです。